

藤枝静男『田紳有楽』に顕れる「天皇制」と「天皇」

山田 侑 奈

1 はじめに

藤枝静男『田紳有楽』（昭和五十一・五十二）は、真実であるとされてきた言説の「イカモノ」性を暴く小説である。本作には古色のついた真物とされる焼き物が実は偽物であるとか、苦行僧の称号を得たラマが元々は偽坊主であるとか、生物と無機物の間に生まれた奇跡の子どもが実は田螺の子であるとか、流布している仏教言説が実は釈迦の教えを無視したものであるとかの挿話が、種々にわたって展開されている。これらは、一部他人の経験談を借りてはいるものの、多くは藤枝によって創作された言説であり、「イカモノ」性が暴かれたとしてもそれは言語遊戯の域を出ないであろう。しかし問題なのは明らかに戦後日本の「天皇」観を反映していると考えざるを得ない「天皇」言説が見られることである。そうであると考えれば、藤枝が「天皇」の「イカモノ」性すら暴いてみせたとはいえることは、果たして可能なのであろうか。そこで本稿では、あくま

でも私小説として、藤枝本人の人生観に引きつけて読まれてきた本作を、戦前、戦後を生き抜いてきた藤枝の人生観の形成に無関係ではあり得ない「天皇」に注目して読解することで、『田紳有楽』一篇に顕われた「天皇」の在り方、ひいては藤枝の「天皇」観を明らかにする。

2 『田紳有楽』以前の「天皇」

2. 1 「志賀直哉・天皇・中野重治」における「天皇」観

藤枝には、本人が心覚えと注釈をつける随筆「志賀直哉・天皇・中野重治」^(一)（昭和五十・七）がある。丁度「田紳有楽前書き」^(二)が発表された時期に書かれたこの随筆は、藤枝が敬愛する志賀直哉の全集出版にあたり、志賀中野両氏の往復書簡を読んでの気づきをまとめたものである。その書簡を通じた志賀と中野のやりとりにつ

いて、藤枝は以下のようにまとめる。

昭和二十一年三月十一日の読売新聞にのった中野氏の「安倍さんの『さん』」という文章を読んで激怒した志賀氏がすぐに速達を出して中野氏を糾明したことにはじまる徳永直氏を混えてのいきさつで、主題は直接には僚友安倍能成非難に対する怒りであったにしても、むしろ根幹はより多く天皇および天皇制に關していると思われるものである。(三三九頁)

そして両氏の、互いに誠意をもちながらの激論に敬意を抱きつつ、「この私の尊敬する二人の氣質上的一致」を見る。その氣質とは、「天皇」を「天皇制」の犠牲者と見ることであった。

志賀氏が、天皇を天皇制の犠牲者として、自由にものを云うことを奪われた、残念ではあるが気の弱い、人間的には好い人という、むしろ年長の保護者に近い眼で見ていたことは前掲の小文「天皇制」によっても明白である。(三五八頁)

志賀直哉「天皇制」(三)とは、以下の文章である。

今度の戦争で天子様に責任があるとは思はれない。然し天皇制には責任があると思ふ。天子様の御意志を無視し、少数の馬鹿者がこんな戦争を起す事の出来る天皇制、——しかも最大限に

悪用し得る脆弱性を持った天皇制は国と国民とに禍となつた。

そして中野については以下のように観察している。

中野氏の「五勺の酒」を読めば、中野自身がニュース映画で見た天皇、あの操人形さながらの動作とテープ録音そっくりのセリフを棒たらに繰返す天皇の憐れさへの何とも処理しがたい心持ちと焦立ちを、老校長に托して描いていることもまた明瞭である。(三五八頁)

共産黨員中野重治は、あの天皇の姿に、打ち倒すに足る帝王をみつけるかわりに、天皇制によって食い破られて人間たることを否まれ続け今もお否まれつづけている憐れなロボットを捕えているのである。(三五八・三五九頁)

では、志賀と中野のこのような一致を見て、藤枝は「天皇制」に對してどのような立場をとるのであろうか。本随筆は、『暗夜行路』の「特権階級子弟の金銭的無反省」、「目したのものへの人格無視」、「作者の年齢的成長と時代の歴史的変転による影響がまるで見られない」こと、「技法上のチグハグ」等を指摘する中野による批判に對する、条件付きの志賀擁護に終わるため、藤枝自身の「天皇」観はよくわからない。しかし、志賀及び白樺派の作家が「対天皇感情」と「下級者蔑視根性」を分離した状態で持っていたことを指摘し、

前掲「天皇帝」のような感覚の根が「学習院的記憶と結びついた敗戦天皇への憐愍」にあると見ていること、天皇本人への肉体的親近感に基づく彼らの特権意識を、藤枝は「私の癩には触らぬ」と書いていることは見過ごせない。藤枝は中野を「被圧迫労働階級への献身者中野重治」と書くが、医師でありながら資産家たる医師の娘と結婚した彼が中野と同じ感懐を抱くことは実態として不可能である。この文章の眼目は、中野の指摘も一理あると受け容れつつ、藤枝が直に触れてきた志賀の印象を挙げて、志賀の擁護をし、さらに志賀及び藤枝自身の特権意識を冷静に捉えているところであろう。よって、この文章によって「天皇帝」について藤枝の考えるところを決定することはできないが、少なくとも志賀の感覚を否定する考えをもっておらず、さらには志賀の「天皇帝」個人への親しみを、環境による特権意識に帰していることは読み取れる。笠野頼子はこの随筆について、藤枝が志賀と中野を「天皇帝」で結びつけたものであるという解釈を書いた^(四)が、藤枝が企図したものはそれだけでなく、志賀と中野の差異を明らかにし、自身が持つ志賀に依拠した「天皇帝」観を整理する試みでもあったのではなからうか。その点、藤枝の「天皇帝」観を検討する上でこの随筆は重要である。

2. 2 「愛国者たち」における「天皇帝」観

実際に藤枝が「天皇帝」と明記した小説内登場人物は「愛国者たち」^(五)（昭和四十七・八）の明治天皇である。明治二十四年五月十一日

に発生した大津事件に取材した本小説は、大津事件の関係者四名を主人公に立てた形の「客観小説」^(六)である。

この事件をめぐる愛国者の名を後世に残したものは、下手人の三蔵と、責任者の明治天皇と、ロシアの怒りを解こうとして自殺した畠山勇子と、裁判を指導して勝利をおさめた大審院長児島惟謙の四人である。（一一六頁）

寺田透・丸谷才一・田久保英夫による「創作合評」^(七)にて、この明治天皇の造形がかなり特殊であることに触れられている。寺田透は、明治天皇の反応が一般民衆の反応と多く違わないことを指摘し、以下のように発言する。

この前の「凶徒津田三蔵」でも明治天皇の、この事件に対する反応の仕方が、ごく普通の民衆と同じように直接なのね。あんな悪いやつは、すぐ車裂きの極刑にでも処さなければいけないというように、そういう反応は普通の民衆の反応と同じようなものだった。天皇というのが、そんなに人格化されていない。実際そうだったかどうかどうだったかは問題もあるんだけど、とにかくこの小説の中でも、また「凶徒津田三蔵」の中でも、天皇はまだ雲の上の人になっていない。

小説の中に「ロシヤが」「支那と日本に南下しよう」と意図しているこ

とを、彼は津田三蔵とほぼ同様に、しかしもっと遠く、厚味をもった予見として感じている」とあるように、明治天皇の感懐が民衆のものとは変わらず、あくまでも「人間」であるように描いている点で、藤枝の特異性がみられるという。また、丸谷才一は、「明治天皇」を「愛国者」の一人に挙げている点で「アイロニカル」であるとし、以下のように述べる。

現代日本の常識では、明治天皇を、右の側も左の側も愛国者とは考えないだろうという事です。(…)それに対して、一人の人間として明治天皇を見ることがあるから、愛国者の中に数えるわけです。そこところが非常におもしろい考え方だと思っただけです

藤枝が志賀中野両氏の「天皇」観を肯定する側に立ったことは、明治天皇を限りなく「人間」として書いたことから明瞭であろう。実際、藤枝が天津事件に興味をもったきっかけとなる人物は明治天皇ではなく津田三蔵と畠山勇子であった。そのため「愛国者たち」における明治天皇の描写は、他の三名に比べて明らかに少ない。だからこそ、その数少ない描写の中にある明治天皇の「人間」的な描写が特徴的に映るのである。本文中「償い得るものは自分ただ一人」と「考えていた」彼には、畠山勇子とは別の、特権階級たる「天皇」意識からくる自己犠牲の覚悟が滲んでいたであろうが、一連のやり取りの中で「ひどく疲労し、数日のあいだにひとまわり痩せていた。

彼は事件突発以来ほとんど満足に食事をとっていなかった」と描写されるように、肉体を持つ「人間」としての明治天皇が強調される。ロシア皇太子ニコライに対し、ロシアに恐怖する日本、という背景を持ちつつも、友としての心遣いを忘れない明治天皇の態度は、あくまでも「天皇」を役割の一つと考え、心の通った「人間」として外交の手を尽くす「睦仁」の態度であった。ここに、志賀・中野の気質と通う藤枝の「天皇」観の一端が顕われていよう。「愛国者たち」における「天皇」はあくまでも「人間」として存在しているのである。

しかし、「凶徒津田三蔵」のこと⁽¹⁾で明らかにされた「人間」三蔵に対する嫌悪と同情が明治天皇には全く向けられず、しかも小説内人物・明治天皇の人間性を掘り下げることをしていないことから、藤枝が「天皇」を「保護者に近い眼」で見ると特権意識から自由であったとは言いがたく思われる。この点において、「愛国者たち」は心を持つ「人間」たる「天皇」を用意しただけであり、「志賀直哉・天皇・中野重治」でも見られたような知識人たちの言論から一歩も離れられていない。「天皇」が「神」の機能を与えられたのと同様に、ここでは「人間」の機能を与えられたに過ぎないのである。だからこそ、「天皇」に否定的な言葉を投げかける『田紳有楽』は、藤枝の「天皇」観を検証する上で重要な手がかりとなるのである。

3 『田紳有楽』と「天皇」

小説『田紳有楽』は昭和五十一年五月に講談社より出版されたが、あとがき(九)を参照すると、先行するテキスト(『田紳有楽』、「田紳有楽前書き(一)」、「田紳有楽前書き(二)」、「田紳有楽終節」)が存在し、それらを繋ぎ合わせ加筆訂正したものが『田紳有楽』としてまとめられたとある。本稿では藤枝の表現の変化を時期に沿って追うため、初出版から順を追って検討することとする。

3. 1 「田紳有楽」に見える「天皇」への助走

初出「田紳有楽」は、『群像』昭和四十九年一月号に掲載された。誰とも明示されない「私」と、処世術を「私」に一方的に語り水に飛び込んで消える滓見が登場する、文体としては従来藤枝の私小説に近い短篇である。ここでは未だ確かな「天皇」の形象は見られないものの、続く「前書き」、「終節」に接続されるような「天皇」モチーフがある。以降では初出に見られるそのモチーフを確認したい。

3. 1. 1 村松梢風の「天皇」観

まず着目すべきは、「私」が「高平山」に登った際に現れる「村松梢風生家跡」を見物する一幕である。ここで語られる村松梢風は、廓文学の垂流という自認のもとに吉原ものを書き続けた情話文学の作家であり、大正十二年に上海へ行ったことをきっかけに演劇の世界とも交流があった人物である(一〇)。その梢風は、『甚史記』中の「或

る夜の感想」(一一)において、「天皇」について次のように言及する。

有史以来の大敗戦を遂げて、完全な亡国状態に陥れ、軍人以外にも多数の補弼の臣が戦犯の罪を問われて自殺したり絞首刑に処せられているのに、国家の中心で而も大元帥が晏如として位に留まるということは如何なる事情の下においても有り得ないことである。爰に至って道理も人情も没却し、責任というものはい全く影を潜めて、人間はいかなる場合にも責任を取る必要のないことを天皇が身をもって範を示したのだ。(九七、九八頁)

これは、中野に連なる「天皇制」批判の見解である。梢風は、「人間はいかなる場合にも責任を取る必要のないことを天皇が身をもって範を示した」と書いていることから、明らかに「天皇」を「人間」と見ているといえよう。藤枝は「田紳有楽」に同郷の作家梢風と妻とのエピソードを引き、病床に伏す自らの妻を連想している可能性もあるが、ここには「天皇」が登場しない「田紳有楽」の時点で既に「天皇制」を批判する文脈が登場しているのである。

3. 1. 2 道鏡と「天皇制」の動揺

長さ三センチちかく、短かい後肢のあいだからニューと別物のように伸びているのを見ると、私は不意に道鏡の少年時代を連想したのであった。(『群像』昭和四十九・一、五五頁)

続いて着目すべきはこの「田紳有楽」ラストの一文における道鏡の下りに込められた「天皇」モチーフである。家の庭にある池に棲息する、オタマジャクシの頃の尻尾を残した食用蛙を見た「私」の連想である。これは、江戸期の川柳「道鏡はすわるとひぎが三つでき」を想定しているであろうが、果たしてそれだけを示すために描写されたのか。道鏡にまつわる伝説は様々に流布しており、引用箇所にある「少年時代」を確認できるような文献は存在が確認できない。藤枝はこのような伝説から、独自に「少年時代」を「私」に連想させていると考えられる。

道鏡について『続日本紀』を参照すると、河内国、弓削連の出身であること、すなわち仏教の浸透していた地域に生まれ育ったことが判明する。おそらく道鏡の人物像を形成するに最も貢献している記述は、道鏡が天皇の位に就こうとしたといわれる事件についてのものであろう。

鷲森浩幸は、『続日本紀』における道鏡の描かれ方を詳細に検討している(二二)。それによると、『続日本紀』における道鏡事件の解釈は明らかに道鏡の陰謀に帰しており、さらに「平安時代初期にすでに道鏡事件は道鏡が僧の身でありながら、皇位をうかがった事件であったとする、強固な認識が形成されていたと断言してよい」と言えるほど強く後世の道鏡像に影響を与えているという。

しかし『続日本紀』は道鏡の即位を阻止した側の手に成る記述であり、それが真実を映すとは限らない。「道鏡悪僧説」は戦後否定さ

れ始め、今では道鏡の陰謀説、称徳天皇主体説、二者以外に主体を求める説に分かれている、というのが鷲森の観察であり、真相が未だ定まっていない。

このような道鏡の存在をなぜ藤枝は小説内に引き入れたのかと問うとき、「巨根説」だけを戯れに想定していたとは思われないのは、起源のはっきりしない言説を否定してゆく、という小説の大きな枠組みが存在しているからである。血統としての「天皇制」を崩壊させかねなかった人物たる道鏡のモチーフは、焼き物の丹波が行う(父殺し)を導くとともに、既存言説の正統性を疑わしめる機能を果たしている。「私」の見たオタマジャクシと道鏡の連想に以上のような機能が企図されているならば、『田紳有楽』に通底する「天皇制」及び「天皇」のモチーフは、初出「田紳有楽」に始まるといえよう。

3. 2 「田紳有楽前書き(二)―イカモノ「天皇制」

「志賀直哉・天皇・中野重治」が「田紳有楽前書き(二)」に影響を与えたとは言い切れないであろうが、これらの構想は時を同じくすることから、関連があると考えるのも差支えなからう。「田紳有楽前書き(二)」では、焼き物・丹波が自身の存在意義を確かめるため、師匠サイケンラマとのチベットの旅を振り返る。明らかに「天皇」のモチーフが挿入されるのは、ここにおけるスパイ・山村三量の発言である。以下、山村による「天皇」発言をまとめる。なお、いずれも傍線は引用者によるものとする。

① 「私は先刻自分の身もとを支那甘肅省生まれのラマだと申し上げましたが、これは真赤な偽りで、実は天皇陛下の命を受け青海チベットの地形政情をさぐる目的をもって潜入した日本国密偵なのであります。甘肅地方に長らく止まっていたことは事実でございますが、これもひとえにラマ僧の身分をとろうがため、私は昔も今も一今となつてはますます仏教など信ずるところか、靈魂などと申すものはもともとありはせぬと考へているヤクザ者なのでございます。経文をくわしく読みますれば、釈尊生前の仰せには、地獄極楽や善因善果のおさとしなど一言もありはいたしませぬ。私は風の便りに日本国が戦争に負け天皇がイカモノの正体を現したときいて、それをこの両眼で確かめるためにこれからどうともして故国に帰り着こうと決心してチベットを出てまいつたのでございますが、さてよくよく考へてみれば、帰つたところでさし当たりどうしようという当ても何もないのです」(『群像』昭和五十・四、二十八頁)

② 「天皇だ日本だチベットだお釈迦さんだと、本当を云えば口から出まかせ。国へ帰つたらあんた方みたいな男のうわまえをはねてひと山あててやろうと、こうして旅を急いでいるというのが私の本心さ」(同、二十九頁)

③ 「殷の国の天皇は、山の方に住んでいた羌という蛮族を狩り

の獲物にしていたそうだ。虎や鹿といっしょに射殺して食用にもするが多いときは三百くらい生けどりにしてきて犠牲用に殺したそうだ。天の神とは交通不能で効力がないけれど、もひとつ下の地の神様や先祖や死人の霊には効きめがあったらしい。天皇陛下にも効き目があったらしい」(同、二十九頁)

このうち、①にある「天皇がイカモノの正体を現した」の言は、中野重治が『アカハタ』に書いた「道徳と天皇」(昭和二十一・二)における「あらゆるニセモノも天皇ほどのズウズウしさをみせたものは一人もない。天皇はニセがねつくりの王である」に似通うものがある。藤枝が書簡を読み、中野の『アカハタ』の文章を集めたのは昭和四十九年十二月以降であるため、「田紳有楽前書き(二)執筆時に中野の文章を引き受けていると考へてもおかしくはないであろう。先に見たとおり、藤枝は中野の批判の中心が「天皇制」にあると考へていたとするならば、ここでの山村の「天皇」批判も一旦「天皇制」批判と捉えられるのではないか。

③の「効き目」が何を指すのか判然としないが、「天皇」と「神」が全くの別物と考へられていることは疑いない。これら山村の発言をまとめると、「天皇」が「神」の流れを引くものであるというニセの言説を信じさせてきた「天皇制」は敗戦によって崩壊し、その「イカモノ」の正体を現した、全て「口から出まかせ」であった、となる。ここでの「天皇」及び「天皇制」批判は、先の志賀・中野両氏の「天皇制」見解とおおよそ一致すると考へられる。

しかし、従来の私小説的な読解で為されたように、山村を藤枝の分身の一形態と捉えたとき、ここでの発言は「志賀直哉・天皇・中野重治」に見られたような親近感をもった「天皇」観とは一致しない。この差異が生まれた理由を検討するために注目すべきは「天皇」ではなく、ともに否定されている「仏教」や「お釈迦さん」である。「経文をくわしく読みますれば、釈尊生前の仰せには、地獄極楽や善因善果のおさとしなど一言もありはいたしませぬ」の言は、そのまま「田紳有楽終節」に引き継がれることになるのだ。

3. 3 「天皇」への怒り

さらに、この「田紳有楽前書き(二)」と「田紳有楽終節」発表の間に、見落としてはならない「文芸時評」での言及がある。昭和五十年十一月、東京新聞の夕刊で掲載された「文芸時評」で、藤枝は以下のような「怒り」を表明した。その全貌を示す(一三)。

これは文芸時評ではないが無関係ではない——天皇の生まれてはじめての記者会見というテレビ番組を見て実に形容しようもない天皇個人への怒りを感じた。哀れ、ミジメという平生の感情より先に来た。いかに「作られたから」と言って、あれで人間であるとは言えぬ。天皇制の「被害者」とだけ言ってすまされてはたまらないと思った。動物園のポロポロになった駝鳥を見て「もはやこれは駝鳥ではない」と絶叫した高村光太郎が生

きていて見たら何と想像したろうと想像して傷ましく感じた。三十代の人は何とも思わなかったかも知れぬ。私は正月がくると六十八歳になる。誰か、あの状態を悲劇にも喜劇にもせず糞リアリズムで表現してくれる人はないか。冥土の土産に読んで行きたい。(三七八頁)

佐多稲子「時に佇つ」評に先立って書かれたこの「天皇」観は、「志賀直哉・天皇・中野重治」より明らかに一歩進んでいると考えられよう。この「怒り」について、伊藤成彦は昭和五十一年二、三月号『春秋』にて、以下のように書いている。

三島由紀夫は天皇に対して、なぜ人間になったかと恨み、藤枝静男は、お前はそれでも人間か、と怒っているのだから、天皇としては立つ瀬がなさそうだが、そこに「人間天皇」というものの本質的な背理が両側面からみごとに照らしだされている。(…) 藤枝静男は、いかに「現人神」を演じさせられてきたとはいえ、天皇も人間ならばどこかに人間の尊厳の意識を残しているように想像していたもののようにみえる。しかし事実はそのカケラほども残さぬまでに畸形化は徹底していた。それが天皇制というものであった。(「五勺の酒」と「ポロポロの駝鳥」より)

これに続いて伊藤は、「天皇」Ⅱ「人間」という考え方も、「天皇」

「神」と同じくフィクションであったと指摘し、だからこそ藤枝のこの「怒り」がフィクションを暴くものであったと評価した。藤枝はこの時、「天皇」が「天皇制」の存在する限り「人間」としての尊厳を得られぬままボロボロの駝鳥になってしまふ真実を眼差したのであり、それが先に見た山村の言のような「天皇」をも含んだ「天皇制」の否定へと繋がっていくのである。「天皇制」が「イカモノ」の正体を現した戦後から三十年、「天皇」が「人間」の尊厳を放棄している姿を見て、藤枝はそこに「イカモノ」の正体を感じとったのである。それが「田紳有楽終節」及び、『田紳有楽』への加筆に顕われていると考えられよう。

3. 4 「田紳有楽終節」―「真贋」の捨象

焼き物たちの主人、そして初出「田紳有楽」の「私」が、釈迦の命を受けて五十六億七千万年後に説法するための準備をしている弥勒菩薩の化身であると判明するのが、「田紳有楽終節」である。藤枝は、家では仏教を信仰していたというものの、「田舎の仏教」、「仏教」としてちゃんと整とんされたものではなく、それ以前の、ヒンズー教に通じるようなものじゃないかという気がする」と述べる。そのため、ここで描かれる「仏教」の正しさは問題にはならない。あくまでの藤枝の「仏教」認識の在り方を確認していきたい。

まず、先に引用した①の「経文をくわしく読みますれば、釈尊生前の仰せには、地獄極楽や善因善果のおさとしなど一言もありはい

たしませぬ」であるが、弥勒が地蔵と出会い、釈迦の思い出話をする場面にそれを裏付けるエピソードが語られている。

（地蔵）師匠は人が死んだ後どうなるかなんて一度も云ったことがなかった。生まれかわるなんて云ったこともなかったしね。そこへ行くと私なんかこっちへ来て以来極楽とか地獄とか六道の辻とか、賽の河原なんて云われて弱り果ててますよ。まあ嘘も方便、インチキもあんたの来るまでのつなぎだと観念してはいますけどね

（弥勒）個の実在はない、何も無い。土になり風になり水になるが自分はない。生せず滅せず増さず減せずなんてね。思い切ったことを云ってたな。きつい人だった。（『群像』昭和五十一・二、五十四頁）

そして、釈迦の教えを離れて「インチキ」がまかり通っている「仏教」の現状に対して、弥勒は次のように捉えている。

何時であったか、婆羅門の提舎と名乗る男が梵天の孫だとか云ってヒマラヤの山のうえに現れて大王に問答をいどんだことがあった。身の丈二丈ばかり、突き出した太い腹に二重の真赤な銅板を巻き、頭の上には一塊の火を乗せていた。「拙僧は十八種の大経はもとより数知れぬ經典書物を学んだのでこの腹がはち切れそうである。だから破裂を防ぐために銅版を巻いているの

である。頭の上の火はこの世が愚で真暗な法に満ちているから道を照らすための灯である」と云った。そこで大王が「行者よ、汝の腹中を見よ」と手をあげて招くと長さ四丈余りの雌雄黒白の大牛が現れて左右から行者の腹を貫通し、彼は黒液を庭にほとばしらせてどうと倒れた。そして後に残されたものは雨に打たれたひとつくねの黒いビニール合羽のような彼の遺骸のみであった。十万世界はすべて斯くの如く行者の腹から流れ出た暗愚の黒汁に覆われつくしているのである。(同、五十一頁)

行者の腹中にあつたのが「經典書物」の内容であるならば、その腹から流れ出た「暗愚の黒汁」は「經典書物」の内容である。ここからも、世の中にまかり通っている「仏教」の言説がすべて愚かな「インチキ」であると考える弥勒が浮び上がってくるであろう。地蔵との会話を見ると、それは釈迦が言及していなかったから、という一点に帰す考えでもある。ここには、肉体的に接近していた釈迦個人を懐かしむ心がある。この弥勒の見解を、個人の意志を無視して都合の良いように作り変えられた言説への批判とするならば、ここにおいて先の「天皇制」批判に接続する藤枝の見解が顕れていると考えられるのではないか。「釈迦」と「仏教」及び「天皇」と「天皇制」は切り離されており、「釈迦」と「天皇」は尊重し、「仏教」と「天皇制」は「イカモノ」とする、このような見解を看取できよう。志賀のいうとおり、「天子様の御意志を無視し、少数の馬鹿者がこんな戦争を起す事の出来る天皇制、——しかも最大限に悪用し得る脆弱

性を持った天皇制」への批判である。

しかし、これだけで藤枝の「天皇制」に対する考えが以上のようなものであると結論づけるのは早計である。釈迦は「個の実在はない」とも言っているため、釈迦という個人の實在に権威性を付与し教えを一義に決定することは、釈迦を懐かしむ弥勒の恣意的な行為であるとも読める。しかも弥勒は、自身と地蔵の影に「大王の庭で婆羅門提舎の吐いた黒汁」を見ているのである。これは、釈迦の教えを直接聞いているはずの自身や地蔵にも「インチキ」さが宿っていることの自覚ではないか。この自覚を否定できないから、所々にニヒリズムが表出するのである。さらにその「インチキ」さの自覚は、釈迦にまで付与される。焼き物・柿の蒂からもたらされた「今日から五十億年の後には太陽がどんどん膨れあがって地球も月もなかへくるめこまれ」という科学説が、釈迦の「五十六億七千万年後」の命令を軽々と否定するのである。結局、弥勒が既に自覚していたとおり釈迦が直接表明した言説すらも「インチキ」であった、という事実が示され、弥勒が抱いていた「釈迦」の権威性は、その恣意的な言説の自覚とともに崩壊するのである。

ここから、藤枝の「天皇」観とは、「天皇制」を「イカモノ」とするだけでなく、「天皇」の権威性をもはつきりと「イカモノ」とするものであったと考えられるのではなからうか。先の「怒り」を踏まえても、この時期には「天皇」すら「イカモノ」と見えていたのである。この点において、志賀の持っていた「保護者に近い眼」は、「天皇」を特別視し擁護するものであつてはならなかった。

では、弥勒が疑いつつも信じていた釈迦の「イカモノ」性が暴かれることが、この小説の終着点なのであろうか。そうではなく、次の妙見の存在が救いの可能性をもたらす終着点となり得る。

弥勒さんよ。人間、虫ケラ、魚、けだもの、草木、土に水に空気が、みんな流れるだけで互いに何の関係もないぞよ。斯くの如きすべての流れを識るのがお前さまの勤めじゃがや。十億土とは黒い洞穴までの道のり、真黒々の暗闇が即ち浄土。これが
お前さまへのわしの引導じゃア（同、六十三頁）

すべての「関係」を否定し、ただ存在の「流れ」を認識することが、弥勒の役目であるとするこの言葉は、釈迦と「仏教」を「関係」させ真贋を決定づけることをも捨象する力を持っている。さらに、弥勒が釈迦との「関係」をもとに特別な存在としての「釈迦」を作り上げていたことをも照射する。真贋の「関係」も捨象され、「関係」によって形作られてきた伝統も捨象され、目の前に存在するものだけがただ存在していること、それらが時空に流れていくことだけが見つめられるようになってはじめて、個が個としての存在を許されるのである。すべての「イカモノ」性が暴かれたとしても、「関係」が不在の地点においては真贋の区別も不在となる。「釈迦」の権威も「仏教」の伝統も「イカモノ」であり欺瞞であった、という自覚がこの小説の終着点であるならば、救いはない。しかし、藤枝はその「イカモノ」性をも否定し、個別の存在を「関係」から解き放たれた個

として尊重する地平を用意しているのである。その地平が、ラストの上下関係から解き放たれた「存在」たちのお祭り騒ぎである。ここでの「存在」は、真贋など意識されずにただ「流れ」ることが可能となっているのだ。

「釈迦」も「天皇」も、その「関係」から見出される権威性を捨象された状態で、個別の存在を尊重され得るべきである、という考えがここに見られる。それは、志賀の特権意識から来る「天皇」への憐愍よりもむしろ、中野の提示する「天皇制によって食い破られて人間たることを否まれ続け今もお否まれつづけている憐れなロボット」の方に傾斜しているものであり、志賀に依拠する「天皇」観を自省したという点において、自身の「天皇」観の「イカモノ」性を暴いてみせた、とも言えるのである。

3. 5 『田紳有楽』における〈父殺し〉の顛末

「田紳有楽終節」では、丹波による師匠・サイケンラマ殺しが行われている。この〈父殺し〉は、『田紳有楽』刊行の際に「終節」以前の短篇にも加筆された主題である。その様相を検討し、『田紳有楽』での〈父殺し〉が〈大逆〉という「天皇」の文脈に接続し得るものであるのか問うてみたい。

初出「田紳有楽」から「田紳有楽終節」までが『田紳有楽』として刊行されるとき、大きく内容の変更は見られないものの、重要な加筆が為されていることに注意したい。細かな修正箇所を除き、大

きく加筆された箇所のうち次の二か所に注目したい（二四）。

勿論本音はその奥にある。私だって変身によって弥勒下向まで生きのびて成仏永世したいのだ。出羽の三山にはミイラになって待ってる連中が埋っているそうだが、そんな野暮は御免だし、さりとてこのまま汚い泥のなかに浸って五十億年も我慢してられるものか。うまく行ったら偽阿闍梨黙次にとってかわって三代目となり、手近い魚をたらふく食いながら弥勒さんを待つくらいの腹づもりはしているのである。（二六三頁）

地中のすべては深い眠りのなかにあった。私は暗い水のなかにかすかにきらめく微塵子の層を通して夜の闇を見上げた。すると闇の奥の更に高い空中から「不生不滅、不滅不増、万物空無」という轟くような威嚇の聲が私を打ちひしぐように響いてきた。そして次の瞬間、何という不思議、私の身体は急に軽くなり、ふわふわと上昇をはじめたと思うとそのまま水面を切って池のはたにピチャリと投げだされたのであった。そして熟柿さながらに軟化して潰れた私の遺体から黄色っぽい手脚がゆっくりと伸びひろがり、頭らしいものが生え、私は人間に変じて立ちあがると上から池を見下ろしていたのであった。「萍見だ、萍見だ」と私は叫んだ。するとそれに答えるように偽阿闍梨のおごそかな声が地底を伝わり池の水を潜って響いてきた。「蝦蟇を持ってこい、皮剥きを持ってこい」（二六六頁）

「田紳有楽前書き（一）」で発表された、視点人物（焼き物）の一人柿の葎視点の場面に加筆が行われ、これらはいずれも偽阿闍梨にまつわるものである。この偽阿闍梨は、阿闍梨ヶ池に棲息する蛇で、周辺の部落民からは水神として拝されている存在である。偽物である訳は以下のように説明される。

弥勒は釈尊滅死五十六億七千万年のちに兜率天から下りてきて、釈尊救いもれの衆生のために説法をする。これは誰でも知っている。そこで鎌倉時代の修験道の院敷尊者という高德の阿闍梨が、このありがたい説法を聞きたさに身をこの池に投じて大蛇となつて永世を策した。——ところがそれから七百年を経た日本敗戦の一年ばかりまえの秋のこと、食料めあての疎開先きで野菜泥棒をやつて追い出された拳句乞食となつてここまで迷いこんできた黙次という男が、人間の姿に帰ってうっかり池の端を散歩していた院敷を撲殺して大蛇になりかわり、その権利を奪つて住みついてしまったのである。もともと水利水害の支配者でもない院敷尊者自体が偽物であったのである。（二六二頁）

ここで注意しておきたいのは、柿の葎がこの偽阿闍梨に「とつてかわる」策略が、『田紳有楽』にて加筆されたことである。「終節」で丹波が〈父殺し〉を行うまで、「前書き（一）」にはそのテーマが引き込まれてはいなかった。加筆によって明らかになった柿の葎と偽阿闍

梨の因縁を、「終節」丹波とサイケンラマの因縁と接続してまとめる
と、実は柿の帯が狙っていた偽阿闍梨は、すでにサイケンラマが黙
次を殺して「三代目阿闍梨」になりかわった姿であり、それを見抜
いていた丹波が、柿の帯に師が殺されてしまうよりは自分が殺し「大
恩に酬い」たいとのことで〈父殺し〉を敢行した、という筋になる。

丹波がサイケンラマと再会した場面には師弟の絆が顕われているが、
殺しの場面は慈悲など存在しないグロテスクな描写となっているう
え、「こうして私はかねての望みを果たし、四代目阿闍梨の位にのぼ
ったのであった」と述べる丹波の本意とは、師を柿の帯から救うこ
とではなく、師から「阿闍梨」の位を奪うことであつたらう。師を
「インチキ大蛇」と呼び嘲る丹波である。この点は、サイケンラマ
以降の主人であるスパイ・山村三量が「天皇」を「イカモノ」と嘲
ることと対応する描写であり、全くの同質とはいき切れないものの、
「阿闍梨」と「天皇」が重ねられていることが看取できよう。

では、この〈父殺し〉で達成されたものとは何か。まず指摘でき
るのは、系統の否定であろう。元々「阿闍梨」とは水神などではな
かったのである。そのうえ、「阿闍梨」と何の関係もない者が〈王殺
し〉によってその「阿闍梨」の位を身体ごと奪う代替わりのシステ
ムは、「万世一系のごとき不死の身体をもった王」（桂秀美）^(二五)の
「万世一系」否定にほかならない。そして「大逆」を達成できな
かったとされる「道鏡」がここに接続する。「万世一系」の「天皇制」
を「イカモノ」でないとする証拠は存在するのか。「道鏡」の既存言
説ですら真実と断言しきれないのである。水神だと信仰され続ける「阿

闍梨」が水面下で少なくとも三度の「大逆」に遭い、その度に主が
入れ替わっている事実が、「天皇制」にないとして言い切れるの
か。ここに、これまで見てきたような藤枝の「天皇制」への懐疑の
一端が見て取れるであろう。言うまでもなく、「周辺の部落民」は我々
「国民」であり、「水神」＝「阿闍梨」は「天皇」なのである。

しかしそれだけではない。現実の時系列において藤枝が「天皇」
個人への「怒り」を露わにしたのちの〈父殺し〉であることを考慮
すると、藤枝による想像的「大逆」が敢行されたと言つてもよいの
ではなからうか。見てきたとおり藤枝には、初出「田紳有楽」執筆
時から「天皇」を打ち倒す意図があつたわけではない。あくまでも、
「天皇」を我々「人間」と同じ存在とみなし、尊重し、志賀と共有
する「保護者に近い眼」で見たいのである。それが、「天皇」本人
によって裏切られたと感じたとき、〈父殺し〉へ到達した。

サイケンラマは、丹波の〈父〉であつた。それは、丹波がサイケ
ンハクという名を贈られたことから看取できる関係性である。さ
らに、丹波が殺すべきサイケンラマは蛇体なのであり、桂秀美が言
うところの「男根的父権」^{フタルス}を象徴する存在にほかならない。丹波は、
そのような〈父〉を殺すことで「自らが新たに実体的な父権となる」
(桂秀美)ことを画策し、決行したが、「四代目阿闍梨の位にのぼつ」
て「新たに実体的な父権」となること、すなわち「大逆」を達成し
得たわけではなかった。

なぜなら、丹波はサイケンラマを絞め殺す際、焼き物の身体では

力及ばず、蛇体を「輪切り」にするしかなかったからである。蛇をファルスと見た場合、丹波の行為は去勢にほかならない。丹波は〈父殺し〉敢行の手段として、その父権を去勢することしか選り取れなかったのである。〈王殺し〉を行ったとされる黙次やサイケンラマがどのようなシステムで蛇体になりかわったのか明かされることはないもの、丹波が蛇体になりかわったという描写が存在しないことは事実である。自らの手で「水神」Ⅱ「阿闍梨」の父権を去勢した丹波の前には、なりかわるべき強権的な〈父〉などもはや存在していない。ただ父権を去勢された元〈父〉の死体がバラバラに散っているのみである。そのため、丹波は称号を戴くだけの空虚な「阿闍梨」となった。「こうして私はかねての望みを果たし、四代目阿闍梨の位にのぼったのであった」とは、「私」Ⅱ丹波による主観にすぎず、丹波が「実体的な父権とな」ったわけではない。黙次やサイケンラマは、先代の蛇体をそのまま受け継ぐことで「阿闍梨」として君臨したが、丹波はほかならぬその蛇体Ⅱ「男根的父権」を去勢した者であるから、「阿闍梨」なりかわりのシステムに組み込まれるとき「男根的父権」を象徴する存在になどなれる筈がなく、丹波による〈父殺し〉は本質的に失敗していると言わざるを得ないのである。

このようにしてみると、小説による藤枝の想像的「大逆」の結末はどう捉えられようか。藤枝の「怒り」の根拠は、「天皇」の父権的なものにはない。むしろ、父権の欠落した「天皇」には、「人間」として再起することを期待していた。その期待が「天皇」本人によって裏切られた瞬間が、あの「テレビ番組」であったのであり、ここ

に「怒り」の根拠がある。この時藤枝にとって「天皇」とは、山村の言う「イカモノ」の「天皇」を越えて「イカモノ」の「人間」となっていたのではないか。「イカモノ」「人間」とは、サイケンラマよりもむしろ「人間」の言葉を操る焼き物・丹波のほうである。ここに、「天皇」モチーフの二重化が行われていると読む時、想像的「大逆」は、「天皇」Ⅱ「人間」というフィクションを自覚しないままに「天皇」に期待した自らの過ちをも剔抉する主題となるのである。

「イカモノ」の「人間」、丹波が決行した〈父殺し〉をそのまま「天皇」のモチーフと重ね合わせたとき、丹波によるサイケンラマ殺しには、「天皇」による「天皇制」打破の試みが描かれているように見える。このとき「天皇制」は、見せかけの血縁関係で継続している「阿闍梨」の系譜と重なる。そして戦後、人間宣言によって「天皇」自ら「天皇制」の父権を去勢したことが丹波の「輪切り」の裏付けとなる。事実、「天皇」という位は今も存在しているが、その「父権」Ⅱ支配権はないのである。そうして「四代目阿闍梨」となった丹波が、柿の蒂のような「人間」に擬態できないのと同じく、人間宣言をした「天皇」は「人間」でありながら「国民」に同化できずにいる。このような側面を読み取るならば、藤枝の想像的「大逆」とは、「天皇」自ら「天皇制」を打ち破るための試みである。しかし、人間に「人間」たることを辞めさせた「天皇制」は打破すべき父権を既に奪われており、「天皇制」の「被害者」たる「天皇」ももはや自我を持つ「人間」性を取り戻すことをせず、「天皇制」を打ち破る力を持ち得ていなかった。それゆえに、丹波の〈父殺し〉は実態とし

て何も生まない。これこそが、藤枝の見ていた「糞リアリズム」である。藤枝は「天皇」に期待していた自身を振り返り、それが「埒もない夢」であったことを『田紳有楽』にて表わしたのではなからうか。その意味で、『田紳有楽』の〈父殺し〉は、〈大逆〉になる前に挫折しているのである。

ただし、笙野が述べる藤枝の「優しさ」は、以上の失望と挫折をそのままにはしない。「天皇」を、すなわち「裕仁」を救うためには、唯一つ、「関係」の抹消以外にあり得ない。前項で見てきたように、全ての「関係」から解き放たれた地平での個別の存在が眼差されてはじめて、「人間」が個人として尊重され得る。〈父殺し〉の結末も、あのお祭り騒ぎであり、そこに藤枝の新たな期待の萌芽が見られるのである。

4 おわりに

「志賀直哉・天皇・中野重治」において、藤枝は志賀直哉の肩を持つように見える。しかしそれは、志賀の「天皇」観が特権意識に基づいているものであったことを明記しており、中野の見解にも理解を示しているような「心覚え」であった。同時期に書かれた『田紳有楽』一篇にも「天皇」への言及が為されており、表面的には「天皇」イカモノ説を唱えるように見えるが、その実態は、従来の「天皇制」批判と「天皇」を特別視していた自己批判であったとも捉えられる。『田紳有楽』とは、諸言説の「イカモノ」性を暴くに留まら

ず、すべての人間、すべての存在が、言説という「関係」なくして「流れ」ていくような理想郷への到達を試みた作品であったといえよう。

ただし、本稿では、〈父〉というモチーフ、および藤枝の「家」認識について検討しきれなかった。『田紳有楽』を私小説とする藤枝は、〈父〉に実際の父親を投影していたと言えるのか。性慾と自己嫌悪を描く私小説群を検討し、再考したい。

《注》

- (一) 一九七六・五・二二、講談社より刊行された、『群像』掲載小説「田紳有楽」「田紳有楽前書き(一)」「田紳有楽前書き(二)」「田紳有楽終節」(一九七四・一〜一九七六・二)を加筆訂正した作品。

- (二) 初出『文藝』、一九七五・七。本文の引用及び頁数は『藤枝静男著作集』第一巻(講談社、一九七六・七・一二)に依拠する。

- (四) 初出『婦人公論』第三〇巻第一号、一九四六・四。
(三) 『会いに行って 静流藤娘紀行』講談社、二〇二〇・六・一六。「志賀直哉・天皇・中野重治」の分析は、「3 志賀直哉・天皇・中野重治・共産党・師匠・金井美恵子・朝吹真理子・吉田知子・海亀の母・キティ・宮内淳子・私……?」

から「6 特権階級意識の潜在と天皇への親愛感」に渡って詳細に行われている。

- (五) 初出『群像』一九七二・八。本文の引用及び頁数は『藤枝静男著作集』第三卷(講談社、一九七六・十一・十二)に依拠する。

- (六) 藤枝は「愛国者たち」が単行本『愛国者たち』(講談社、一九七三・十)として刊行された際の自著後記に『愛国者たち』は客観小説で他は私小説ということになるのだろうが、私の考えでは同じ小説である。」と書いている。ここで「客観小説」と括弧付けで示したのは、以上のような意図である。

- (七) 『群像』一九七二・九。第三〇四回創作合評にて「愛国者たち」が取り上げられた。

- (八) 初出『朝日新聞』一九六二・二・二三。小説「凶徒津田三蔵」を執筆した際の苦勞が綴られている。この中で藤枝は、津田三蔵への嫌悪感が噴出したために当該小説の執筆を中断せざるを得なかったと書く。

- (九) 『藤枝静男著作集』第六卷、講談社、一九七七・五・二八。ここでは、「この一篇は、最初単に「田紳有楽」とだけして十枚を「群像」昭和四十九年一月号に載せ、「田紳有楽前書き(一)」三十三枚を四十九年七月号に、「田紳有楽前書き(二)」

五十四枚を五十年四月号に、最後に「田紳有楽終節」百十枚を五十一年二月号に載せたのち、全部に手を入れて本にしてもらったものである。」と示される。

- (一〇) 『現代作家伝』(新潮社、一九五三・五・二五)所載「梢風物語」参照。

- (一一) 初出『新潮』一九五三・六。本文の引用及び頁数は『私の履歴書』(金文堂、一九五七・五・五)に依拠する。

- (一二) 『藤原仲麻呂と道鏡』(ゆらぐ奈良期の政治体制) (吉川弘文館、二〇二〇・八・一)を参照した。道鏡についての本稿の言及は、殆ど鷺森氏の記述を軸にしている。鷺森氏は、道鏡事件の真相を、称徳天皇による仏教の権威と接合させた天皇制への移行であったとするが、その真相の解明は本稿の主眼ではないため、省略させていただく。本文の引用及び頁数は『藤枝静男著作集』第四卷(講談社、一九七七・一・一六)に依拠する。

- (一四) 本文の引用及び頁数は『藤枝静男著作集』第六卷(講談社、一九七七・五・二八)に依拠する。

- (一五) 『帝国の文学―戦争と「大逆」の間』(以文社、二〇〇一・七・一〇)参照。以下用いた桂秀美氏の言及は、全て本論考に依る。